

仲間の一員としての「私」の在り方[†]

—大人の意識の在り方を問う—

渡辺 浩行*・高柳 恭子**・前原 由紀**・高根沢伸友**
星野さやか**・坂本 修子**・長谷部せり**・岩淵千鶴子**
宇都宮大学教育学部*
宇都宮大学教育学部附属幼稚園**

近年では大人のマナーを始めとする社会全体の規範意識の低下が問題となっており、子どもたちの自尊心や規範意識の不安定さなど、心の活力が弱っている傾向が指摘されている。また、学習指導要領の改訂では多様な角度から道徳教育の充実・改善が図られ、幼稚園教育要領では規範意識の芽生えを培うためには、幼児期から様々な場面で多くの体験を積み重ねていかなければならないと明示された。幼児期においては、協同性の育ちがより質の高い自己発揮を目指し「仲間の一員としての自分」を意識することで可能となり、この意識こそが将来的には規範意識につながり道徳的な心情の基盤となるものであると考える。そこで、幼児を取り巻く大人の意識を問うアンケート結果や文献研究から幼児の規範意識の育ちの視点で幼児期に大切にしたい教育について述べたい。

キーワード： 規範意識、自己有用感、仲間の一員、協同性、自尊感情、大人の意識、道徳教育

1. 研究のねらいと方法

本園は、これまで幼児期の道徳性の芽生えや協同性の育ちについての研究を進めてきた。その結果、日頃の教師のかかわりを見直すこととなった。幼児は友達関係が発展し協同的な活動が多くなればなるほど、「仲間の一員として自分はどのようにすべきか」を考える機会を得ることになる。質の高い自己発揮は、「仲間の一員としての自分」を意識することで可能となる。この意識こそが、将来的には規範意識につながるものであり、道徳的な心情の基盤となるものであると考える。幼稚園において子どもたちは友達と共に生活をする。子どもたちは互いに自分の思い・気持ち・考えなどを交流し合い、「私はどうあるべきか」を意識し、考えるようになる。したがって、幼児の規範意識の育ちは、友達の存在を意識するところから始まっていると言えるのである。幼児が友達に興味をもち、友達のすることに興味を引

かれ、友達と遊びたいと思うようになる。

このような、幼児と友達とのかかわり（友達関係）の発展が協同性の育ちにつながるのである。幼児は友達とのかかわりの中で、思いやりの行動をすることがある。この行動は、幼児が「友達として私はどうすべきか」を考えた行動であると言える。それゆえ、思いやりは規範意識の育ちを表していると言えるだろう。子どもたちの友達関係が発展し、協同的な活動が増えれば増えるほど、子どもたちは「仲間の一員として私はどうすべきか」を考えることになるのである。また、子どもたちがそのように考えられるように育てていることが、協同性を支えているのである、といった榎沢良彦氏の主張を受け、これまでの協同性についての研究を生かしながら、幼児の規範意識の育ちの視点で幼児期に大切にしたい教育について研究していきたいと考え、研究の主題を「仲間の一員としての『私』の在り方」とした。研究するにあたり、様々な視点からテーマに迫ろうと試みた。文献から教育状況の変遷を辿り、発達心理学者の理論から大人の道徳教育と子どもの発達についての捉え直しを図りながら考えていくことにした。また、幼児を取り巻く大人が、規範意識についてどのような意識をもっているかを探るためにアンケートを実施し、その結果を様々な角度から考察し

[†] Hiroyuki WATANABE*, Yasuko TAKAYANAGI**, Yuki MAEHARA**, Nobuyuki TAKANEZAWA**, Sayaka HOSHINO**, Syuko SAKAMOTO**, Seru HASEBE** and Chiduko IWABUCHI**: Children Learning Roles of Group Member — In Search of Normative Consciousness of Adults —

* Faculty of Education, Utsunomiya University

** An Attached Kindergarten, Faculty of Education, Utsunomiya University

ていった。

そして、日々保育する中で会う子どもの姿から、仲間の一員としての「私」を幼児が自ら確立していくためには教師のどのような援助が必要かを考え、それらの中で、仲間の一員としての「私」の在り方について、今後明らかにしたい視点を明確にしていきたいと考えた。

2. 研究の内容

(1) 文献研究から

主に山岸明子の著書『発達を促す教育心理学』を参考文献にし、教育状況の変遷と発達心理学から複数の発達の考え方を知り、幼児教育で大切にしたい道徳教育の在り方について考えて、次のような課題を導き出し、今後、これらを明らかにしていくことにした。

- ・ 幼児期において、大切にしていきたい大人のかかわり方の具体的な姿とは何か。
- ・ 幼児期からの「道徳教育」を考えた時に「主体的、自律的に学ぶ力を身に付けさせる」ために大人がどうかかわったらよいか。
- ・ 幼稚園、小学校、中学校の12年間の発達を見通した中で幼児期に大切にしたい育ちとは何か。
- ・ 幼稚園教育と家庭教育で大人はどうかかわっていったらよいか、かかわり方に違いがあるのかを見直し、具体的な行動について共に考える機会を設け明らかにする。
- ・ 幼稚園教育では個によってより細やかな対応も考えられるが他にどのような援助が必要かを見直す。

(2) アンケート調査結果から

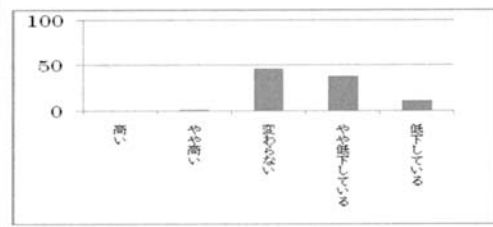
幼児を取り巻く大人を対象にアンケートを実施し、その結果から大人が規範意識についてどのような意識をもっているかを探り、様々な角度から考察した。対象者は幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の教師、大学生、保護者で総数は359名である。

① 規範意識についてのアンケート結果から

・ 子どもの規範意識は低下しているのか

子どもの規範意識が低下しているといわれるが、大人たちはどのように感じているのだろうか。私達は「子どもの規範意識は低下している」の回答が多いと予想したが「変わらない」の回答が半数を占めたことに驚いた。それでも一般的に規範意識が低下しているといわれるのはどうしてなのだろうか。

子どもの規範意識は低下していると思いますか？

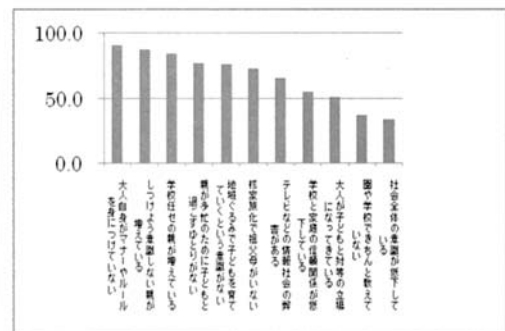


○「低下している」「やや低下している」という回答を合わせてみるとやはり、低下していると感じている人の割合は大きい。しかし、実は、「変わらない」という回答はそれらの回答を合わせたものより多い。

・ 規範意識を低下させているのは大人？

規範意識が低下しているといわれるのは、何が原因と思っているのかを問うてみたところ、「子ども自身の問題」ではなく「子どもを取り巻く環境の変化」や「大人自身の問題である」と感じているようである。だから、前項目の「子どもの規範意識は低下しているか」の問いに対して、子どもは変わらないという回答が多かったのだろう。

「規範意識」が低下している原因は何ですか？



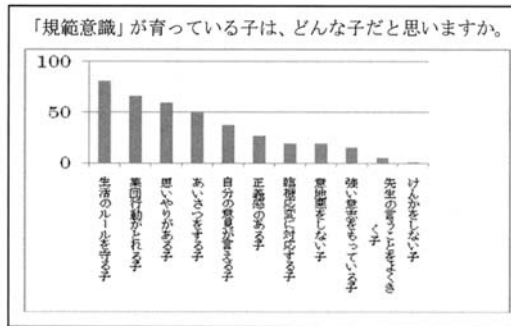
○「おとな自信がマナーやルールを身につけていない」「社会全体の意識が低下している」が1位、2位を占めているところが多い。
○次いで、「学校任せの親が増えている」、「しつけようとしていない親が増えている」など保護者に関する内容も高い割合を占めている。

・ 大人の規範意識に対する考え方を知る

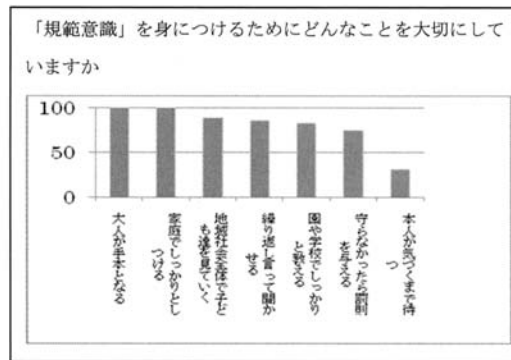
多くの大人が「規範意識の低下の原因は大人にある」と考えているとすれば、その大人たちが、規範意識に対してどのような考えをもっているのか分析し、私たち大人の在り方を今一度、見直してみる必要があるだろう。

規範意識が育っている子のとらえでは、「先生の言うことをよく聞く子」や「けんかをしない子」が

少数意見であった。推測ではあるが、先生に言われた通りに行動するのではなく、自分自身の意思で判断できる子を望んでいるのではないだろうか。また、「けんか」の意味を肯定的にとらえ、思いをぶつけ合いながら、直接的に人とかかわる経験が大切であると思っている大人が多いと思われる。規範意識が育っていく過程で大切なことを、大人自身の経験から感じて回答していると思う。



また、「規範意識」を育てるための方法を問う質問では、「本人が気づくまで待つ」と「罰則を与える」という回答が極端に少なかった。子ども自身にすべてを任せ、放っておけばよいものでもなく、かといって大人がその権威を利用して抑圧的に教え込むものでもない多くの大人が認識している。



これらのアンケートの結果から、大人は子どもたちが人とかかわりながら、自分自身で規範意識を獲得していくことを期待しているのではないかと推測できる。しかし、子どもだけでは経験の中からそれらを培っていくことは難しい。しかし、子どもを取り巻く様々な立場の大人がそれぞれにどのようなかかわりをしたらよいのだろうか。

② 幼児を取り巻く大人の意識を探る

・規範意識を育てるために大切だと思うことは何か
ここでは、幼児を取り巻く身近な大人を「学校教育に携わる大人」と「保護者」としてアンケートを

行った。同じ「大人」でも立場が異なると回答に違いがみられるかを探ってみた。

○ 学校教育に携わる大人の意識を探る

幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の教員が規範意識をどのように考えているかを知るために教育活動の中で大切にしていることを問うてみたところ、各学校種ともに目の前の子どもたちの発達に応じた課題をとらえ、大切にしたいこととして位置づけていた。各学校によって、子どもの発達が異なるのであるから教師の願いや子どもたちに伝える内容や方法が異なるのは当然の結果である。各学校種ともに、目の前の子どもたちの発達に応じた課題をとらえ、大切にしたいこととして位置づけている。「責任感」は、ある程度、意識が育ってからの課題だから、中学校で初めて出てくるのであろう。

このように各学校によって、子どもの発達が異なるのであるから、教師の願いや子ども達に伝える内容、方法が異なるのは当然の結果である。

どの学校種も集団の中で人と様々な形でかかわりながら、自分はどうかあるべきか、実体験を伴いながら心を揺らして考え、判断し、行動できるようになってほしいと思っている。つまりは、教員として「目指す子ども像」は同じだが、その時期の子どもの発達によって求める内容や方法は異なってくるであろう。これらのデータを基にそれぞれの学校種が自分たちの教育観だけではなく、12年間の子どもの発達を見通して、子ども達に規範意識が育つために自分たちは何を大切にしたらいいのかを明らかにしていきたいと考える。

	幼稚園	小学校	中学校	特別支援学校
1位	思いやりの心をもつ	思いやりの心をもつ	思いやりの心をもつ	自分のことは自分でする
2位	元気よく遊ぶ	ルールを守る	ルールを守る	ルールを守る
3位	自分のことは自分でする	友達と仲良くする	責任感をもつ	あいさつをする
4位	あいさつをする	自分のことは自分でする	あいさつをする	思いやりの心をもつ
5位	ルールを守る	うそをつかない	公共のものを大切に使う	友達と仲良くする
あまり思わない	・けんかをしない ・大人の言うことをきく ・正義感をもつ	・けんかをしない ・大人の言うことをきく ・正義感をもつ	・けんかをしない ・大人の言うことをきく ・友達と仲良くする	・けんかをしない ・正義感をもつ ・元気よく遊ぶ

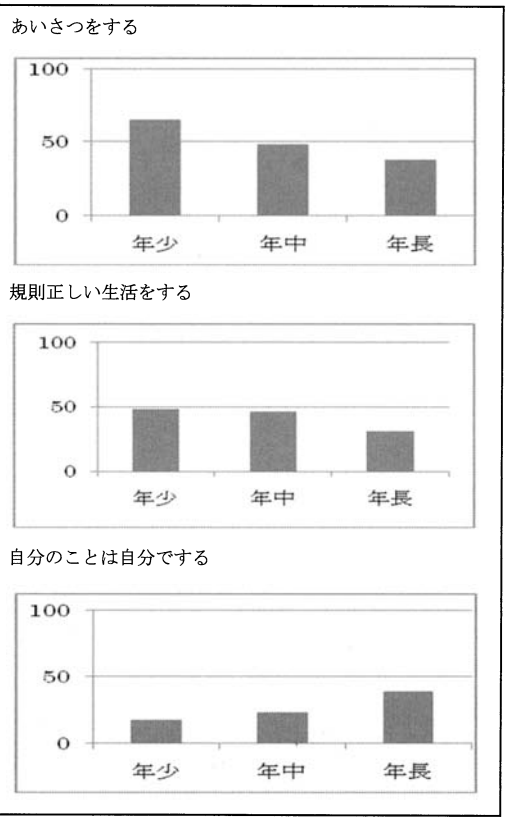
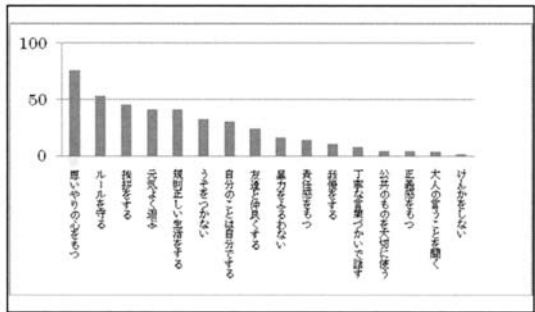
また、「思いやりの心をもつ」の項目については、幼稚園、小学校、中学校ともに1位であったが、実

際の子どもの姿や具体的なエピソードで話し合いを
 すると、イメージしている姿に微妙な違いが見えて
 くるかもしれない。それらを互いに知ること、「幼
 児期にしつけられていない」「児童期に話をきく態
 度を身につけてくれない」「年齢が進むにつれて子
 どもの思いをくもうとしない」などといった教育観
 の相違によって起こる誤解が解消されていくのでは
 ないだろうか。また、それぞれの学校種で大切に
 している姿がより明確になり、それぞれの教育観を理
 解した上で、自分たちの教育観が深まったり滑らか
 な接続が行われたりすることを期待したい。一方、
 幼稚園の2位の回答が「元気で遊ぶ」であったが
 他の学校種にはこの項目の回答はない。幼稚園の教
 員は「遊び」の中に様々な規範意識を育てる要素が
 含まれていると考え、「遊び」を通して人とのわか
 わり方、物事の考え方、感情のコントロールの仕方
 などが総合的に育っていくと考えているのである。
 他の学校種にはない幼稚園教員の独特な教育観であ
 るのかもしれないが、この考え方は、特に小学校の
 低学年の教員には知っていてほしい考え方である。
 幼稚園の教員は実際に「遊びや生活」を通して幼児
 がどのような経験をしているのか、具体的な場面を
 挙げながら明らかにし、説明する必要がある。

○保護者の意識を探る

一方、保護者は「規範意識」を育てるためにどの
 ようなことが大切だと思っているのかを問うてみた
 結果、「思いやりの心をもつ」が1位であり、「大
 人の言うことをきく」「けんかをしない」が少数意
 見であり、学校種別の回答と同じような結果が出た。
 保護者も同様に人とかかわりながら自分で判断し、
 規範意識を獲得していく子を望んでいると思われる
 が、家庭では子どもにどのように接しているのだろ
 うか。また、保護者の思う「思いやりのある子」の
 イメージはどのようなものなのか、さらに学年の差
 はあるかを分析してみたところ、「あいさつをする」
 「規則正しい生活をする」項目を選択した人の割合
 は年長になるに従って減っていた。「自分のことは
 自分でする」の項目の割合は年長になるに従って増
 えていた。割合が減っていく項目は、年長になるに
 従って子どもたちに身につけてきた事柄であるから
 であろう。また、増えていく項目は子どもたちが依
 存から自立へ向かう過程の中で保護者が、年長であ
 れば当然そうなっていてほしいという願いの表れだ
 と思う。やはり、発達や年齢によって家庭で「これ

だけはしつけない」とか「この時期にぜひ身につけ
 ておきたい」と思う内容がありそうである。



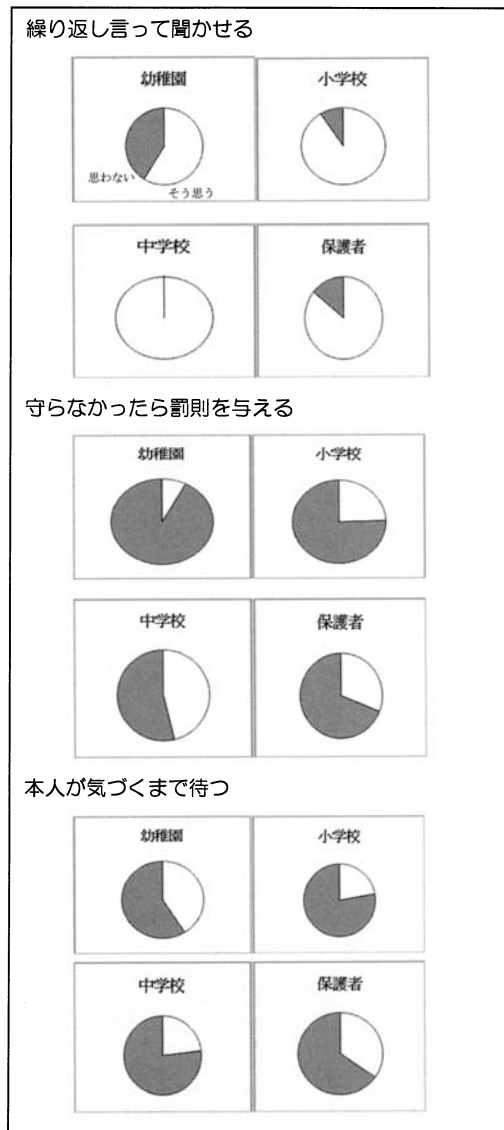
・実際にどのように子どもに接しているか？

「規範意識」を育てるために大切だと思っている
 ことを、実際に子どもたちにどのような方法で伝え
 ようとしているのかを問うてみた。その中で特に立
 場によって回答にばらつきが見られたものを選んで、
 考察したい。

○学校種別の回答の違いから

全体的に教員たちは、子どもたちに罰則を与えて
 強制的に規範意識を植え付けても、共通の目指す子
 ども像である「自分で判断して行動する子ども」に
 はならないと思っているようである。しかし、子ど

もが集団生活を送りながら様々な出来事に出会い、気づくまで待つだけでは規範意識は育たないとも考えている。では、具体的にどのような方法が有効なのだろうか。また、中学校の回答で罰則を与える割合が多かったのは、社会に出れば「法」が存在し、場合によっては罰則を受けることもあるという「社会」を意識しての回答ではないだろうか。幼稚園の割合が低いのは物事の道理を理解できずに、大人の権力によって支配されやすい年齢だからこそ「それでは育たない」という幼稚園教員の自覚であるかもしれない。さらに「繰り返し言って聞かせる」のは、教師が諭すことによって、自分のこととして考えられる中学生の発達があるから有効と思われる。



○保護者と幼稚園教員の意識の違いから

幼稚園は集団の教育の場で、一人ひとりの持っている異なる規範意識が出会い、それぞれに感じたり揺れたりしながら、自分で価値を獲得したり見直したりしながら新たな規範意識を形成していくことを大切にしているのではないか。一方で家庭は、一人ひとりの規範意識を十分に形成する場でなければならない。また、保護者と教員という立場の違いもある。立場が変われば子どもへのかかわり方が変わるの理解できる。

③幼児園でのある生活場面から

このアンケートは日常に起こる子ども同士のトラブルに対して、教師や保護者はどのようなかかわり方をするのか、その方法を問うたものである。以下のエピソード1は幼稚園でのある生活場面であるがその中でどのような対応をとるのかについて、それぞれの立場で特徴ある回答から考察したい。

エピソード1

室内のジュニアブロックを使ってともひさが崩しては作るといった具合でくり返し遊んでいる。ともひさは宇宙船のイメージがある様子である。そこへゆうたがふらふらとやってきて「手伝ってやるよ。」と遊びの中に入った。ともひさは快く返事をして2人の宇宙船作りが展開することになった。

ゆうたは「手伝ってやる。」と言ったにも拘わらず、2~3回もジュニアブロックを積んだらあとは宇宙船によじ登り座りこんで、もうすっかり自分のものにしてしまった感じである。そのうち、ともひさが一番大事にしている操縦席に座るとともひさが座っている所を指して「これはエンジンだ。操縦席はここだけ、一人乗りだ！」と言ってとうとうゆうたはこの宇宙船のをとってしまった。ともひさは少し困った顔をしたかと思うと、次にさっと小さなブロックを作ってきて「これビーム砲だよ。」と言ってゆうたにさしだす。ゆうたはそれを見てつかむと何だこれはとばかりに投げ捨てた。そこでともひさは、今度は少し大きくブロックを作ってきて「大砲だよ。」と見せる。これにゆうたも歓喜して受け入れた。そこでともひさも再び操縦席に着くことができた。
(名前は仮名である)

○学校種別の回答の違いから

幼稚園の教員は幼児たちの思いを探りながら、「二人で遊ぶことがどんなに楽しいことか」「友達がいることで遊びが楽しくなる」など友達と共にいる楽しさを伝えようとしている援助が多かった。初めて集団生活を経験し、葛藤することが多い幼児に、他人を肯定的に受け入れる気持ちを育てたいと願っているのではないだろうか。また、幼稚園の教員が、トラブルの過程において様々な場面でいろいろな援

助の方法をとっていることもわかる。この時期は、個の発達に応じて様々な手立てで指導する必要があるから、幼稚園の教員は多くの援助の方法を知り、同じ場面でも時期や個に応じて使い分けていくのである。

小学校の教員はある出来事をクラスの問題として共有し、みんなで考えることによって自分の問題として心を揺らしてほしいと考えているようである。自分の体験だけではなく、友達の体験も自分の経験として考えて蓄積していける時期だからなのだろうか。また、集団を意識しながらしていいこと、悪いことを自分なりに判断し、言葉で考えあったり伝えたりできるような指導が多いのも特徴である。

中学校の教員は一つ一つの出来事をその子自身の問題として考えさせるような指導が多い。教師がこれまで積み重ねてきた生徒の経験をもとに諭し、一人一人の価値観に揺さぶりをかけ、社会に生きていく人間としての倫理観を確立してほしいという願いがこめられている。また、幼児たちのトラブルの過程で前半は何も語らず見守っており、子供たちの解決や事の成行きを見守ってから指導をすることも特徴的であった。

○保護者の価値観の多様性とそこから生まれる迷い

保護者は、目の前で起こった出来事に対して感情的に子どもにかかわってしまうことが多い。またかかわりすぎてしまったり方法がわからず結果的に放任になってしまったりすることもある。きちんとしつけない思いはあっても、実際にどのように子どもにかかわったらいいのか、また何をしつけないのかかわからずに戸惑っているように思える。

④保護者の規範意識と子どもの姿の相関関係

ある価値観のもとに育てられた子ども達は、集団の中でどのような姿をあらわすのだろうか。そこで、保護者を対象に日常に起こる場面で保護者の立場ならどうふるまうか、子ども時代の自分ならどうふるまっただかなど、様々な立場に自分を置き換えて保護者自身の規範意識を問う記述式のアンケートを実施した。また、幼稚園の生活場面でのエピソードのアンケートの結果も合わせて分析しところ保護者の回答と幼稚園での子どもの姿に相関関係が見えてきた。

○子どもへの規範意識の伝え方の違いから

日頃から保護者が子どもにかかわるときに保護者自身の規範の価値を子どもに強く示しているかどうかによって、集団生活での子どもの姿にある傾向が

見られた。保護者は本来、子どもの性格や年齢に応じて伝え方を変えたり工夫したりしなければならないと思うが、保護者の性格上、どちらかに偏ってしまうと子どもの姿に大きく影響してくる。最近の傾向として、保護者が価値を強く示すか、まったく示さないかの二極化しているように思える。

保護者が規範の価値を強く示している	保護者が規範の価値をあまり示さない
〈子どもの姿〉 ・こうしなければならないと思いきんてしまい、他の価値を受け入れられない。 ・大人の顔色を見る ・周りの反応を気にして行動できない	〈子どもの姿〉 ・大人の判断を待つ ・周りの子の行動を見てから動き出す

○保護者自身の規範を意識した行動から

アンケートの中で、起こった出来事に対して個の思いを優先させるような行動をとるか、集団の雰囲気優先させるような行動をとるかを問う項目では、保護者自身がどちらを優先しているかによって、子どもに次のような傾向が表れていた。

保護者が個の思いを優先させることが多い	保護者が集団の雰囲気を優先させることが多い
〈子どもの姿〉 ・自己主張が強い ・周囲のことへ関心が薄い ・自分の思い通りにならないと気が済まない	〈子どもの姿〉 ・不安感が強い ・周りの様子を見ている ・すぐには動き出せない

保護者の性格や保護者自身の経験から、何を価値として大切にするかによって、保護者の子どもへのかかわり方は大きく変わってくる。個の思いを優先させることと集団の雰囲気を優先することとどちらが正しいかという問題ではなく、保護者には自信をもって自分の価値を子どもに伝え、子どもが集団生活の中で心を揺らす経験ができるような基礎となる価値を家庭で形成しておいてほしい。その価値を基準として、子どもは集団生活を送りながら自分なりに心を揺らし自分の価値を形成していくと推測する。

○それぞれの学年の特徴から

保護者の回答を子どもの年齢別に整理してみると、それぞれの学年で特徴が見られた。年少児は、保護者の価値観を受けてはいるが、まだ、完全に自分の価値として定着していないので起こった出来事に対して柔軟に対応することが多い。また、自分の価値観をもとに戸惑うことなく素直にそれを表現することができる子が多い。年中児は、相関関係が顕著に表れており、保護者の価値観が影響しやすい時期なのだろう。また、その価値観を基準に集団の中で自分の行動を考える時期だから動けない、戸惑う、

見ている子が多いのではないだろうか。年長組は相関関係がさほど見られず、大人の価値観の影響は受けているが、集団生活を通して「自己の価値観」が作り上げられてきているからであろう。

(3) 幼稚園での生活の姿から

子ども同士の遊びを見ていると、大人から見ると理不尽にも思える様な場面でも、子ども同士では了解し合い、子どもならではのものの考え方や場面の捉え方で納得して遊んでいることがある。また、教師同士でその場面における幼児理解や援助の仕方が違っていることが多い。ここでは、幼稚園でのある場面を、様々な教師の目で捉え考察を深めることで「仲間の一員としての『私』」について考えを深めるきっかけとする。

事例 **どうして入れてあげないの？**

～自分の遊びが充実することで友達の遊びへの思いが分かる～

A 児、B 児、C 児は真っ白なテラスをスケート場に見立て、フィギアスケートごっこを楽しんでいる。3人はそれぞれ「浅田真央」「安藤美姫」「キムヨナ」になってテラスで順番にとんだり回ったりポーズをとったりしている。

その様子を少し離れた場所から D 児がじっと見ている。教師は D 児が仲間に入りたいのだろうと思い、「フィギアスケートごっこを見てるの？」と声をかけてみた。D 児は教師の言葉にうなずいたが、「でも、入れてもらえないかもしれない」と言った。教師は「そうかなあ？」と答えながら「どうしてそう思うのだろう？」と心の中で考えて、D 児がどうするのか見守った。

3人の演技が終わった切れ目のところで D 児は勢いよく「入れて！」と言った。ところが、3人は声をそろえて「ダメ！」と即答した。D 児は「やっぱり・・・」という表情をしてその場を立ち去ろうとした。そのとき A 児が D 児に「ちょっと待ってて。今、誰かよんできてあげるから」といい、A 児と B 児で「誰かフィギアスケートやる人～！」と言いながら「やりたい」と言った2人をよんできた。A 児が D 児に「ほら、これでフィギアスケートごっこできるよ」と言うと、D 児は「ありがとう！」ととてもうれしそうに言った。

そして、A 児たちと D 児たちは3人ずつ別々に遊びだした。

○大人から見て理不尽に思えるところ

ア D 児を仲間に入れて4人で遊べばいいのに、一度断って3人で遊ぶことにこだわるのはなぜか？

イ 結局 D 児は仲間に入れてもらえなかったのに、D 児がお礼を言うのはなぜか？

○仲間の一員としての「私」を考える

仲間の中の一員としての A 児

A 児は D 児の「スケートごっこがやりたい」という気持ちをいち早く感じ取った。しかし、D 児を自分たちの遊びに入れてしまったら、自分たちのスケートごっこもうまく進まなくなることと同時に感じた。最初は、自分たちの遊びがつまらなくなってしまふ思いから「だめ」という言葉が出たのかもしれないが、その後は D 児の思いもわかって D 児もスケートごっこができるように仲間を集めている。A 児は自分もふくめてみんな楽しい思いができるように、最適な方法を考えたのだろう。

仲間の中の一員としての B 児

B 児は、普段から A 児にあこがれていて、A 児の思いには敏感である。このときも、A 児の思いがわかり、A 児の思いに賛同して D 児がスケートごっこができるように仲間を探している。A 児が、D 児の気持ちがわかったからこそ、B 児も A 児を通して、D 児の気持ちがわかったのではないだろうか

仲間の中の一員としての C 児

C 児は、3人でのスケートごっこが楽しくて、D 児の「入れて」という言葉に、すぐに「だめ」と言ってしまったものの、冷静に一步引いてその後の状況を見ている。これからどのようなことが起こるのか、A 児はなぜ「ちょっと待ってて」と言ったのかなど考えながら、様子を見守っている。自分にはない A 児の解決の方法を見て学んでいる。

仲間の中の一員としての D 児

この場面での D 児は仲間に入れてほしくて「入れて」といったわけではない。「スケートごっこ」がやりたくて「入れて」と言ったのである。D 児は、仲間を「遊びを楽しくしてくれる人」としてとらえている。だから、D 児は興味がある遊びが変わると、周りにいる仲間が変容する。その様々な友達との出会いの中で、遊びながら自分のあり様を模索している。

○考察

大人は「入れて」という言葉に必要以上に敏感で、「入れて」と言ったら「入れてあげることがいいことである」と子どもに教えがちである。また「入れてもらえない」状況に入れたい方を責め立てることが多いのではないだろうか。しかし、もし、ここで大人が介入し、良かれと思って、無理やり D 児を A 児たちの遊びに入れても、スケートごっこはうまく進まず、誰も満足することなく遊びがおわってしまうかもしれない。教師が A 児の遊びのイメージを大事にして援助を続けてきたからこそ、A 児は D 児

の思いがわかり、みんなが楽しくなるようなアイデアがわいたのだと思う。また、幼稚園では、この場面でのB児やC児のように、自分で直接かかわりを持たなくても、その場にいることで、心に響いたり感じたりしていることもよくある。

つまり、この時期は、教師が規範を押しつけるよりもひとりひとりの遊びのイメージを大切に、幼児が肯定的な気分で満足して遊ぶことが大切である。幼児一人一人の遊びが充実することが、結果として、友達の思いを感じたりみんなが楽しいと思えるようにアイデアを出したりする姿につながっていくからである。様々な遊びの楽しさを知っている子どもたちには、当然の解決方法だったのかもしれないが、「入れてと言われたら入れてあげる」という発想を、大人である私たちがもっとよく考えてみる必要があるのではないだろうか。

3. 研究の成果と今後の課題

幼児期の規範意識の芽生えを考えると、そこには協同性が密接にかかわっている。幼児は保育者との信頼関係を支えに自己を発揮し、その中で友達とかかわり、互いに自分の思い、気持ち、感情、考えなどを交流し合う。そして、思いを交わしながら「私はどうあるべきか」を意識し、考えるようになる。また、遊びや生活の中で一緒に活動することがうまくなるように、ルールや決まりを作るようになり、それを守ろうとする。友達とかかわりにおいて矛盾する気持ちを感じると、その中で揺れ動きながら「私はこうすべきだ」と判断するようになる。このような心の動きの過程を今一度捉え直していくことで、幼児期の規範意識やより広い意味で道徳性の育ちの姿が見えてくると考える。また、それにより幼児の関係性が深まり様々な学びが得られたり、一人一人の道徳性に更に影響することもあるだろう。本研究では、「仲間」とかかわりながら幼児が「私」の在り方を意識し、幼児の「私」の在り様が変容していく過程を丁寧に見つめ直すことで、そこで規範意識を含め何がどのように培われていくのかを明らかにし、本研究の「仲間の一員としての『私』の在り方」を検討するための視点を次に二点挙げたい。

①学童期以降の育ちを見通すことで

幼児を取り巻く現代社会は、少子高齢化、「家族」の姿の多様化、遊び場の減少、メディアの普及による直接体験の減少など、様々な問題を抱えており、それは幼児期だけの問題ではない。そういった社会

の中で、人とかかわりが希薄になったり健全な相手への思いや共感を感じられなくなったりすることとも危惧されている。また幼児期の教育を考えると、それ以降の育ちを踏まえることは重要である。そういった意味で、子どもの「仲間の一員としての『私』の在り方」が、幼児期以降にどのように変化していくのか把握し、幼児期の教育を見直すとともに、小学校以降の教育機関に対し啓発していく必要があると考える。そこで、今後は、幼児の「仲間の一員としての『私』」の意識が幼児期以降どのように変化していくのか、小学校の教育では子どものどんな育ちを大切にしているのかを明らかにしていきたいと考える。また、子どもは小学校入学を機に、それまでの仲間と離れたり、受ける教育の形態が変わることで友達関係が量的に広がったりすることが予想される。この接続期に注目し、5歳児から1年生にかけて育ちの変化を追い接続期に特に大切すべき内容や教師の在り方、幼児期に必要な経験は何なのか、等を明らかにしていきたいと考える。

幼稚園、保育所、小学校、中学校の教師、大学生、幼稚園の保育者を対象にとったアンケートでは、規範意識は幼児期に育てることが適切との意見が多かったが実際はどうなのかも検討していく必要がある。②家庭と一体となって育てるために

本研究により、規範意識を問う場面で保育者と保護者の意識の差異が浮き彫りとなった。集団保育の場である幼稚園と家庭で大切にすべきとは異なるのだろうか。しかし、その差異を理解し合い縮めていくことやアンケート結果から保護者の意識や幼児とかかわり方と幼児の幼稚園での生活の姿に相関関係が見られことを、今後の教育にどのように生かしていくべきかを考えていく必要がある。

これらを踏まえ、まずは、幼稚園の遊びや生活場面を取り上げ、その場面で幼児がどのような経験をしているのかを「集団だからこそ育つ規範」の視点から考察し、時期にふさわしい教育内容を模索し、保護者に伝えていくことが課題である。そして、家庭で育てたい規範意識の内容、集団の教育の場から育つものの内容を分けて明らかにし、保護者が子どもに身につけさせるための具体的な方法をまとめること、発達や年齢に応じて身につけておきたい規範意識の内容を整理し、保護者、幼児の変容を見ていくことなどを方法としながら、幼児期の望ましい教育の在り方を検討していくことが課題である。